

術前オリエンテーション時の患者と看護婦の知覚 —オーランドの理論をもとにして

2階西病棟

○森山 陽美・森光 真由・秋田美都代
村上 幸・森本 雅子・谷脇 文子

I. はじめに

産婦人科疾患の手術を受ける患者に対して、術前オリエンテーションでは、病名や術式の告知の有無等への配慮から、術前の処置及び術後約3日間の身体動静面を説明の主体としている。しかし、術前オリエンテーションを患者が納得し受容していると思っていたことが、術後、納得不十分であったと感じる質問を受ける事が多々あった。このことは、看護婦と患者間のコミュニケーションが十分でない、つまり看護婦が患者を知覚しきれてない為に起こることではないかと考えた。

オーランドは人間関係論において、看護は患者との相互作用の過程において、「知覚（言葉・表情・動作・仕草）し追究することが重要」と述べている。そこで私達は、オリエンテーション時の看護婦の知覚の様相を知り、知覚し追究する事にどのような事が関連しているかを探る為に、患者と看護婦に術後24時間以内における知覚に関するアンケート調査を行ったので報告する。

II. 研究方法

1. 調査期間：平成8年8月20日～9月20日

2. 調査対象：当産科婦人科病棟において、手術を受ける患者と術前オリエンテーションを実施した看護婦

1) 患者：手術患者11名（調査期間中において無作為に抽出）

2) 看護婦：オリエンテーション実施看護婦8名

（経験年数1年目～16年目まで、重複回答者含む）

3) 対象者の分類（表1）

3. データ収集方法

無記名、記述式によるアンケート調査。

調査時期は両者共オリエンテーション実施後24時間以内。

4. 分析方法

患者に対するアンケート結果（患者群）及び、看護婦に対するアンケート結果（看護婦群）をオランダの知覚の定義に基づき、言葉・表情・動作・仕草として集計・分析した。

5. 定義

オランダのいう知覚とは、言葉・表情・動作・仕草をいう（池田明

表1 対象者の分類

(A~Kは患者とオリエンテーションを実施した看護婦の関係)

	患者群			看護婦群		
	年齢(歳)	病名	術式	経験年数(年目)	所要時間(分)	場所
A	52	上皮内癌	腹式子宮全摘術	11	20	病室(4床)
B	57	上皮内癌	子宮腔部円錐切除術	4	20~30	診察室
C	24	ss39 w 1t 洞不全症候群	腹式帝王切開術	16	30	病室(個室)
D	31	ss14 w 6t 子宮頸管無力症	子宮頸管縫縮術	1	10~15	二人部屋と 診察室
E	27	ss14 w 0t 子宮頸管無力症	子宮頸管縫縮術	6	10	病室(4床)
F	46	子宮筋腫	腹式子宮全摘術	7	30	病室(4床)
G	67	子宮体癌	準広汎性子宮全摘術	1	20	病室(4床)
H	25	卵巣腫瘍	腹腔鏡	7	25	周母センター待合室
I	61	上皮内癌	子宮腔部円錐切除術	1	10~15	診察室
J	70	卵巣癌	腹式子宮全摘術	11	15	病室(個室)
K	36	上皮内癌	子宮腔部円錐切除術	1	10~15	診察室

子の解説による)。動作：外見上の動き

仕草：外見上の細かな動き

III. 結果

言葉について患者群は、看護婦の話すスピードが良いが9名、どちらかと言えば良いが1名、少し速かったが1名であった。言葉遣いは、良いが10名、無回答1名であった。声の大きさについては全員が良いと答え、優しい・丁寧という意見があった。看護婦群は、患者への説明に対して返事があったと答えたものは全員で、声の調子が大きいが5名、やや大きいが1名、普段と同じが4名、小さいが1名であった。

表情について患者群は、柔らかいが7名、笑顔が3名、普段と変わらないが1名であった。看護婦の目線は、目のみが5名、自分の目と顔が2名、オリエンテーション用紙と自分が1名、顔が1名、無回答2名であった。4年目、7年目の看護婦がオリエンテーションをした患者では、親しみがあるや表情が自然であるという意見があった。看護婦群は、笑顔が4名、柔らかいが3名、硬い表情から笑顔に変わったが1名、どちらかと言えば硬いが1名、普段と同じが1名、硬いが1名であった。患者の目線は、自分が6名、オリエンテーション用紙と自分が3名、オリエンテーション用紙が2名であった。

動作について患者群は、ジェスチャーがあったが5名、自然的が2名、なかったが1名、覚えていないが1名、無回答が2名であった。

表情と動作の関係については、患者群で笑顔・柔らかいが10名あり、この内1年目(2名)、11年目(1名)、16年目(1名)の看護婦4名に動作があった。

目線と表情との関係については、看護婦群は患者の目線が用紙のみと捉えた看護婦2名は、患者の表情に対し硬い、どちらかと言えば硬いと捉えていた。患者の目線が用紙と自分という看護婦は3名であり、患者の表情に対しては、柔らかいと普通であると答えていた。他の6名の看護婦は、患者の目線を自分と捉え、表情は笑顔、柔らかい、硬いから笑顔と答えていた。

看護婦の経験年数と表情との関係では、1年目の看護婦は表情について笑顔、どちらかと言えば硬い・普通と3段階、4年目以上の看護婦は4段階に捉え、16年目は表情の変化を述べていた。

仕草については、患者群は、気づいた点はなかったが10名、無回答が1名であった。看護婦群は、説明中仕草は見られなかったが6名、外見上の細かな動きとして、貧乏ゆすりが1名、ベッドのマットレスを触っていたが1名、ベッドに横になっているが1名、用紙を見ているが1名であった。仕草に対する感想では、真剣、一生懸命、リラックスなど心理状態の意見があった。感想なしは、6、7年目の3名であった。

患者と看護婦のアンケート用紙の項目を言葉・表情・動作・仕草で分類し、その回答数を比較(表2)してみると、両群共表情の回答率が最も高く、看護婦群では動作と共に100%であった。

表2 患者・看護婦の「感想」に対する回答数の割合
(回答数/質問数)

	患者群	看護婦群
言葉	20/44項目 (44.4%)	23/44項目 (52.2%)
表情	15/22項目 (68.1%)	22/22項目 (100%)
動作	5/11項目 (45.4%)	11/11項目 (100%)
仕草	0/11項目 (0%)	7/11項目 (63.6%)

両群で差が最も小さかったのは言葉で、

7.8ポイントであった。又、患者群で最も低かったものは仕草0%に対し、看護婦群では63.6%を占めて、大差であった。

IV. 考察

今回のアンケート結果より、着眼すべき点は看護婦の知覚の中の表情と動作である。看護婦へのアンケートの中で、各知覚をどう捉えたか、感想を求める質問に対し、表情と動作について全員回答していた。又、看護婦は患者の表情から患者の必死・素直・前向きなどの心理状態を、動作からは患者の集中して聞く・真剣などの態度と理解度を判断している。そして、表情の判断として、目線が重視されていた。又、患者の表情が笑顔・硬い・柔らかい、の他に、日常の表情との比較や変化している状態を捉えていた。この事は、看護婦の患者に対する表情の硬さの捉え方において、目線の回答が「用紙」

に集中していたこと、一方患者の看護婦に対する笑顔・柔らかいの捉え方には看護婦の動作があったこと、この両者の捉え方から、表情と動作には相互作用が生じていると思われる。さらに、患者が看護婦に対し仕草では全く回答していないこと、言葉に関して全て良好であったと判断していたこと、以上からも表情と動作が知覚のキーワードになっているのではないかと推察できる。表情と動作が伴う事で良い心理的な効果＝知覚をもたらしていると考えられる。従って、知覚する事には、表情と何らかの動作がある事によって相互作用の促進となっていると考えられる。

次に、看護婦の経験年数別による比較では、16年目（1名）の看護婦が患者の表情を硬いから笑顔に変化していたことをあげていたことや、経験年数別回答数の比較から、看護婦の知覚の差があることが解った。しかし、知覚する過程や患者との関わり方までは解明するに至らなかった。

看護婦は、表情・動作・仕草・言葉の順で患者を捉え、相手から何らかの思いを感じており、これがオーランドの理論でいう『知覚』であると言える。こうして知覚し合った事を追求し関わるか、追求せず放置するかで行動が決まり、それを判断することで更に新たな知覚が生じていく。それが相互作用＝互いに影響し合う場であり、看護を展開していく上で重要なことであるというのがオーランドのいう人間関係論である。

今回の調査では知覚の傾向的なものについて多少とも知ることができた。そして、看護の実践においてオーランドの理論が支持できるものではないかと考える。

V. おわりに

今回、オーランドの理論に照らし合わせながら看護婦の知覚のあり方を探ることを試みた。しかし、看護婦が知覚したことを、どう行動に移したかというところまで引き出せず、追求し関わることについての解明までには至らなかった。今後、機会があればこの研究を更に修正、追加し看護場面に活かしていきたい。

参考文献

- 1) I. J オーランド, 稲田八重子訳: 看護の探求, ダイナミックな人間関係をもとにした方法, メヂカルフレンド社, 1991.
- 2) 松木光子他: 看護理論とその実践への展開, 看護 Mook, No. 35, 金原出版, 1993.
- 3) 小林富美栄: 人間関係の看護論, 医学書院, 1973.
- 4) 波多野梗子, 村田恵子: 患者・家族への援助と看護婦の役割, 医学書院, 1985.
- 5) 長谷川浩, 藤枝知子: トラベルビー 人間対人間の看護, 医学書院, 1991.